

〈意見〉

水落 健治

これまで、西方ラテン教会の神化思想についてはおよそ次のような考え方が一般的であった。——西方教会ではアウグスティヌスの影響が決定的であったため、神と人間（=罪人）との間の断絶が強調され、その結果、「神学の宇宙論的次元」を背景にした神化の思想は十分展開しなかった。

しかるに今年度のシンポジウムでは、このような従来の方考え方を打ち破る形で、西方ラテン教会の中に神化の思想が——エリウゲナから十字架のヨハネに至るまで——連綿と受け継がれていたことが明確に示された。

そこで筆者は、かかる成果を踏まえた上で、以下、東方教会と西方教会の神化思想の相違について2つの点を指摘することにしたい。

1. 西方神化思想の個人的性格と東方神化思想の公共的性格

今回のシンポジウムの各報告を聞いて筆者がまず思ったのは、「西方教会の神化思想は東方教会のそれに比較して極めて個人的・神秘思想的色彩が強い」ということである。愛 *affectio* によって神認識に至ろうとしたベルナルドゥス、「内在的超越としての神を宿す魂」による「神への突破」を説いたエックハルト、雅歌注解の伝統に連なる「婚姻神秘主義」を展開した十字架のヨハネらの思想の根底にあったのは「個としての私がいかにして神にまで上昇するか」ということであり、「全宇宙的神化」を説いたクザーヌスにしても、その思想が、たとえば西方教会の典礼などに形を取ったということは考えられない。

これに対して、東方教会の神化思想は教会の典礼の中に明確に表現されている。西方教会の「贖罪を表現する縦長十字架」とは対照的な「全宇宙を表現する方形十字架」の形をなす教会の中で行われる典礼は、上下・左右・前後という「創造の6日」が交錯する中心点、「創造の7日目」であり完成である教会の中心点で執り行われ、これに与る信徒は、そのことによって「全宇宙の神化」に与るものとされる。この意味で、東方教会の神化思想は、狭義の神秘思想とは異なる「全信徒に開かれた公共のもの」と言うことができるであろう。

2. 神化思想における〈ことば〉の役割の相違

筆者が第2に思ったのは、「神化における〈ことば〉の役割が東方と西方とでは根本的に異なる」ということである。

東方神学の起源をなすディオニュシオス・アレオパギテース『神名論』においては、「神にいかなる名をつけることがふさわしいか」という神に対する述語づけの問題が論じられたが、これらは「神への讚美 *ύμνεϊν*」として捉えられていた（『神秘神学』c. 3, 1032d-1033c）。つまり人間は「神は存在である。神は愛である。……」といった〈讚美のことば〉を発することによって「全宇宙の神化」に与り、自らも神化して行くのである。（この伝統は現在に至るまで続いており、私がギリシアを旅行した時にガイドとなってくれたテサロニキ神学校の教授は旅行の間中、絶えず讚美歌を口ずさみ続けていた。）

他方、西方においては、〈ことば〉は、ボエティウスによるアリストテレス論理学の中世への伝達、ペトルス・ロンバルドゥスによる『命題集』の執筆、アベラールによる *Sic et Non* の執筆、アルベルトゥス・マグヌスによる神学への弁証論 *dialectica* の導入などに見られるように、主に「論理学」という形で「神」の問題に関わって来たように思われる。確かに、トマス・アキナスは、東方神学の精華である『神名論』の注解を書いているが、トマスが東方神学の「神への述語づけは神への讚美である」という伝統を十分な形で西方に伝えたかについては疑わしい面もあり、これについては改めて研究されるべき問題であろう。

〈意見〉

桑原直己

筆者は、当日シンポジウムの中で鶴岡氏に対し、氏は「恋愛詩+自註」形式の著作に焦点を当て、婚姻神秘主義の色彩の強いアビラのテレサに由来する素材についての示唆を見ておられるが、『カルメル山登攀』『暗夜』のような「理論的」著作についてもその点は一貫していると考えるか、という趣旨の質問をした。

ここで筆者がこのような質問をした背景について簡単に補足しておきたい。「神秘主義」の歴史において、「婚姻神秘主義」と「本質神秘主義」と